

zen-on piano library

NINO ROTA

SETTE PEZZI PER BAMBINI
IPPOLITO GIOCA

ニーノ・ロータ 子どものための7つの小品／戯れるイッポーリト

Edited by Takahiro Seki

関 孝弘——校訂・解説

表紙の★印はグレード表示です。
一つが課程を表しています。

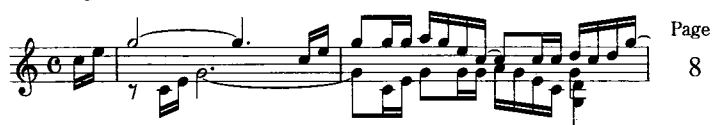
全音楽譜出版社

THEMATIC INDEX

● IPPOLITO GIOCA ●

戯れるイッポーリト

Allegro



● SETTE PEZZI PER BAMBINI ●

子どものための7つの小品

1. SALTI E GIOCHI

ジャンプとゲーム

Allegretto vivace



5. GRILLO NOTTURNO

夜のこおろぎ

Lento



2. CAPRICCIO

カプリッチョ

Allegro



6. PUCCETTINO NELLA GIUNGLA

ジャングルのプッチェッティーノ

Allegretto moderato



3. CANTILENA

子守歌

Andante



7. L'ACROBATA

アクロバット

Tempo di Valzer



4. LE SCALETTE

小さな階段

Tempo di Valzer



◎解説—— 関 孝弘

ニーノ・ロータ

(1911・11・3 ミラノ～1979・4・10 ローマ)

子供の頃から天才としてその名前はイタリア全土に知れ渡っていた。母親は優れたピアニストのエルネスタ・リナルディ、母方の祖父は作曲家でピアニストのジョバンニ・リナルディ(1840～1895)、祖母ジョコンダ・アンフォッシもピアノを弾いた。家庭には常に音楽が溢れており、早くから母にピアノを、ソルフェージュをA.ペルラスコに就いて学びはじめる。このペルラスコとの出会いが作曲家ニーノ・ロータを生む大きな基礎を作り上げる事になる。後にロータは、音楽を書くために必要な物を、7歳から通い始めたペルラスコのソルフェージュですべて習ったと供述している。

ミラノの家は『ロータの家』と呼ばれる程、たいへん有名であった。ミラノを訪れる多くの音楽家達は皆そこに立ち寄り、親交を深めていた。その中にはストラヴィンスキー、カゼッラ、ピッツェッティ、バッラ、ジョルダノ、カステルヌオーヴォ・テデスコ、トスカニーニなどがいた。ニーノ・ロータは幼い頃から、こうした世界の偉大な音楽家達と知り合い、家族のように可愛がられていったのである。

こんな素晴らしい環境のもとで育ったニーノ・ロータだが、性格はたいへん控えめで、飾り気なく素直で純真であった。4歳でピアノ演奏を見事にこなし、7歳から作曲を始めるが、特に即興演奏は簡単に行え、和声付けも実に自然に出来たのである。その頃から多くの作品を書き残していたが、第二次世界大戦の爆撃でそのほとんどが失われてしまった。

8歳で「ソロ、合唱、管弦楽の為のオラトリオ」を作曲。1922年(11歳)に、オラトリオ「幼き聖ジョヴァンニ・バッティスタ」(ソリスト、合唱、オルガン、オーケストラの為)を作曲。このオラトリオは、父親の早すぎた死に際して書き上げられた一種のレクイエムである。1923年4月22日ミラノの盲学校内のホールで初演され、その後フランスのリールでも再演され大成功をおさめる。マスコミは「モーツァルトの再来」と賞賛の言葉を連ね、「天才児」としての彼の名はイタリア、フランスに広がっていったのである。11歳の頃のロータは、自分で絵を描く事はなかったが、音楽よりも美術にたいへん詳しく、年中美術館に通いつめていた。

1923年(12歳)ミラノ音楽院に入学。作曲をジャコモ・オレーフィチェ、デラーキ、バースに師事。後にイルデブラント・ピッツェッティに師事(1925～1926)する。

厳格な古典的骨組みはピッツェッティから教え込まれ、14歳ではアンデルセン童話による喜歌劇「Il Principe Porcaro」(王子ポルカーロ)を作曲している。天才少年作曲家兼指揮者としての評判は益々高まるばかりであった。

その後ローマのサンタ・チェチリア音楽院に移りアルフレード・カゼッラに師事した。その簡潔明瞭な作曲技法にロータは大きな影響を受け、1930年に同音楽院を卒業しディプロマを取得した。しかし、このディプロマはカゼッラの強い勧めで渋々取得したものであった。祖父も母もディプロマを取得していなかったが、立派に音楽家として活躍していたのである。そのような環境の中で育ったロータには、卒業証書であるディプロマの価値は全く理解できず、単なる紙切れとしか思えなかったのである。しかし時代の流れを見抜いていたカゼッラは、弟子のロータの将来を考え、紙切れと思っている卒業証書を取得するように強く勧めたのであった。

翌1931年トスカニーニの助力により奨学金を得てフィラデルフィアのカーティス音楽院に2年間留学。作曲をロザリオ・スカレーロ、指揮をフリッツ・ライナー、音楽史をベックに師事する。週末にはニューヨークにいるイタリアの大指揮者トスカニーニと共に過ごすこともしばしばであった。また、コーブランド、バーバー、ヴォーン・ウィリアムズなどの大作作曲家たちとも知り合い、親交を結ぶ。

イタリアに戻り、ミラノ大学芸術科に入学して文学を専攻し、同時に哲学も修め、ルネッサンス期に活躍したヴェニスの作曲家・音楽理論家ジョサッフォ・ザルリーノ(1517～1590)の音楽美学に関する論文「ザルリーノとイタリア・ルネッサンス音楽」を書き上げ1937年ミラノ大学から芸術の学士号を得て卒業する。

その後すぐにターラントの音楽院で音楽理論とソルフェージュを教える(1937～1938)。1939年からは、バーリの音楽院で和声と作曲の教授を勤める。1950年から1977年の定年まで同音楽院の院長に就任し、その間数多くの優秀な生徒を世に送りだした。その中には、リッカルド・ムーティの名も見られる。

1979年4月10日心臓発作で突然倒れ死亡。享年68歳。ロータの突然の死に、世界中が大きなニュースとして取り上げた。

ロータの本質は純クラシックの世界

ニーノ・ロータの名は映画音楽の分野で世界に知れわたっている。彼が音楽を手がけた映画の数はなんと158本にのぼる。主要作品の一部を列举すると、フェデリーコ・フェッリーニ監督の「道」(1954)、「カヴィリアの夜」(1957)、「甘い生活」(1959)、「8 1/2」(1963)、ルネ・クレマン監督の「太陽がいっぱい」(1960)、ルキーノ・ヴィスコンティ監督の「山猫」

(1963)、フランコ・ゼッフィレリ監督の「じゃじゃ馬ならし」(1967)「ロメオとジュリエット」(1968)……そしてフランシス・F. コッポラ監督の「ゴッド・ファーザー」(1972・1974)のシリーズである。

158本にもものばる映画の音楽を作曲したロータは、世界中から絶賛を浴びているのであるが、彼の心はいつも純クラシックの作品に向けられていて、映画音楽に対する批評や記事には全く興味を示さず、それらを集めるということにはなかったが、それに反して純クラシックの彼の作品に対する記事は全て収集していた。映画の記事では、音楽に対して言及することがあまり多くなかった。そんなことも彼の興味を惹かなかった理由の一つかもしれないが、純クラシックの作品には、強い思い入れがあったのは事実である。「ロメオとジュリエット」の映画音楽は、そのために作曲したものではなく、1960年にイギリスのシェークスピア劇場で演奏された合唱と舞踊のための作品をアレンジしたものである。

あまりにも彼の映画音楽が有名であるが故に、我々は彼の本質であるクラシック音楽の世界を見ることを忘れてしまっているのである。ロータは、全ての音楽の分野に優れた才能を示し、多くの素晴らしいクラシック音楽作品を残しているのを知る人は少ないようである。

ロータ自身「私の本職はクラシックの作曲家である。映画音楽は楽しみで書いているのだ」と述べている。彼のプロフィールを見ればわかるように、はじめはクラシック音楽の作曲家としてキャリアを積み、そのスタイルは伝統に根ざしたオーソドックスでアカデミックなものであった。交響曲、室内楽曲、器楽曲、宗教音楽、バレエ音楽、オペラなど幅広いクラシック音楽を多数残したロータであるが、晩年にはその純クラシックの作品に目を向ける動きが出て、大きな感心が寄せられるようになった。

1955年にパレルモのマッシモ劇場で初演された陽気なオペラ・ブッファ「フィレンツェの麦わら帽子」(Il cappello di paglia di Firenze)は、彼の代表作の一つであるが、その後ヴェニス、バーリ、カールスルーエと再演が続き、1958年にはミラノ・スカラ座でも上演され、稀に見る大成功を収める。イタリア・オペラ・ブッファの世界では、その形式によるオペラを書いた最後の作曲家がロータであったことは良く知られているところである。1960年には、再びスカラ座でオペラ「神経衰弱患者の夜」(La notte di un neurastenico)がミラノ・スカラ座で初演された。その他、「アリオダンテ」(Ariodante) (1942)、「トルクエマダ」(Torquemada) (1943)、「恥ずかしがりやの二人」(I due timidi) (1950)、「素晴らしき訪問」(La visita meravigliosa) (1970)……etc. 多くのオペラを書き残しており、オペラ・シーズンには彼のオペラ

は欠くことができないほど重要なものであった。

ピアノ協奏曲は第1番が1959～60年、第2番が1978年、ピアノ協奏曲(コンチェルト・ソワレ〈夕べの協奏曲〉)が1961年に作曲されている。

宗教音楽の分野では1962年に最高傑作と言われる大作のオラトリオ「秘蹟」(Mysterium)が作曲された。1972年にはイタリア賞を受賞したカンタータ「ローマ・カーポムンニ」(Roma Capomunni)。

バレエ音楽も多く、「道」(La strada) (映画「道」の音楽より)は1965年ミラノ・スカラ座の初演。「詩人の恋」(Amor di poeta)はモーリス・ベジャールの依頼により作曲され1978年にブリュッセルで初演された。

交響曲は1939～1975年に5曲。管弦楽曲は非常に多数。

その他、室内楽、器楽曲、歌曲など本当に広い分野にわたった作品を残したニーノ・ロータであるが、その中には多くの偉大なソリストのための作品もある。ハープ：クレリア・ガッティ、ピアノ：ベネデッティ・ミケランジェリ、フルート：セヴェリーノ・ガッゼローニ、チェロ：ムスティスラフ・ロストロポーヴィッチ、コントラバス：フランコ・ペトラッシ、室内合奏団：イ・ムジチ……etc.

また彼のオーケストラ作品は、カルロ・マリア・ジュリーニ、リッカルド・ムーティ、ジャンルイジ・ジェルメッティ、リッカルド・シャイー、フェッラーラ、フリードマン……など、多くの指揮者によって演奏されている。

ピアニストとしても素晴らしい能力を持っていたロータは、若い時からピアノ・ソロ作品を手がけているが、アンサンブル作品におけるピアノ・パートには、特に重要な要素を与えている。2曲のピアノ協奏曲(第1番はベネデッティ・ミケランジェリに捧げられている。初演はアルド・チッコリーニ)、ドン・ジョヴァンニによる12音のファンタジー、即興曲(ヴァイオリンとピアノ)、ピアノ・トリオ、コンチェルト・ソワレ(夕べの協奏曲)などが代表作である。

ロータと純音楽

ニーノ・ロータの音楽は、感情が素直に直接的に表現されるモダンな詩的表現が特徴であるが、これは初期の頃から顕著であった。歌うような旋律の魅力は、ハーモニー、対位法を凝らして何倍にも広げられていく。青年期には大作作曲家ストラヴィンスキーとも深い友情関係にあり、新しい音楽への興味もたいへん深く、知識も豊富であった。だが、彼の音楽は伝統的なスタイルが常に根底にあふれている。新しいものにすぐ目をやったり、流行を追い求めることはしなかった。洗練されたセンスと、感受性の強い旋律の優位性、複雑な和声を伴わない進行、躍動感あふれるリズムと明解な形式、感情の自然な直接的表現を理想とした。

感傷的な感情移入を避け、高い見識と卓越した作曲技術をもって創造された作品から、聴衆に伝わるのは、高度に磨かれた透明度の高い響きの世界である。豊かな才能ある音楽家は、確かに聴衆の心を掴むことはできるが、ロータのように独特の雰囲気をもって表現された音楽を聴くと、改めて彼の才能の大きさ、豊かさに共感するのである。

ロータの音楽の響きは不思議な魅力を持っている。派手さで人の気をひき寄せることは全くなく、哀愁に包まれつつ洗練された豊かな感情が、親しみやすさとウィットな面と共に表現される。そこから生まれるメロディーは、ロータの音楽の魅力であり、又大きな特質でもあるが、メロディー・ラインの美しさというのはイタリア音楽の伝統的特色なのである。

ニーノ・ロータはたいへん難しい時代の変遷期に生きた。シェーンベルグは12音技法に、ストラヴィンスキーは新古典主義に新しい世界を模索した、調性破壊の時代であった。多くはグレゴリア聖歌やバッハ、1300年代のアルス・ノーヴァに戻りたいと思い始めていた時代である。そんな中、ロータは最後まで調性から離脱することなく、伝統的なスタイルの中に彼の世界を模索したのであった。

ロータと映画音楽

ロータはシンプルで純真な性格で、全ての人と上手く交わることができた。孤独を愛しながらも、仲間と協力して何かを作ることが楽しかったようである。だからこそ、これほどまでに多くの映画監督から慕われ愛されたのであった。158本の映画に音楽を付けたニーノ・ロータであるが、この数は正に驚異に値する。

時間的にも制限の多い映画音楽であるが、発注側からのさまざまな要求も受け入れ、ロータは映画音楽を単なるバックグラウンドのような音楽としては全くとらえておらず、適当に音楽付けをしたことは一度もなかった。彼は映画音楽を低く位置づけることなく、「音楽」を純粹に書き続けたのである。

ロータの音楽的アイデアは常に湧き出るように流れるため、かえってそのあふれ出る音楽を、どのようにまとめ完結させればよいか、その点に大変苦労したようである。映画音楽の創作に於いては、常に締め切りという時間的制約の中で仕上げるという、厳しい世界であったようだが、天才的な即興演奏と、作曲には持ち前のスピードの速さで切り抜けてきたようである。

ロータは映画音楽は数学であると考えていた。音楽的メロディーの前に数字があるのである。例えば、10秒後に

ドアがノックされる迄のシーンに音楽を作曲する場合に、時間との数字関係に音楽が存在することになる。

良い映画音楽とは目立たない事である。非常に高いレベルの音楽は目立つものであるが、それはあくまでも映像の中に溶け込んだ音楽でなくてはならない。

多くの名作映画に音楽を書いたニーノ・ロータであるが、特にフェッリーニ監督との繋がりはいよいよ強く、ロータの存命中は彼の音楽しか使わなかった。極めて容易にピアノの即興演奏が出来、たいへん多種多様な要求課題に、ロータが素早く、そして純真さを持って対応した事を示している。彼の即興演奏はたいへん素晴らしく、変化に富んでファンタスティックなものであった。監督が要求する音楽をすぐ書き上げる才能に恵まれ、多くの監督が満足させられたのである。

あんな素晴らしい映画音楽はどのようにして生まれるか、という質問に、『解らない。自然に頭に浮かび、紙に書いてピアノで弾く。それをすぐに録音する。打ち合わせで、どんな映画なのかさえ理解出来れば、全く問題がない。逆に虚飾が多く心から出た物でなく芸術的センスが感じられない映画だと、たとえベートーヴェンでさえもその映画を助ける事は出来ないでしょう。魅力的な音楽を書けるといのは、音楽の前に映画自体が素晴らしいからなのです』と語っているが、多くの監督はこのロータの言葉に対して『それは当たっていない。映画のシーンが、どれほどロータの音楽に助けられ素晴らしい物になったかは我々が良く知っている。彼の才能は並外れており、皆感謝しているのだ。』と心から賞賛している。

晩年は、フェッリーニ、コッポラの2人の名監督とだけ仕事をした。フェッリーニの場合はロータと2人で音楽をつくり出したが、ゴッド・ファーザーで知れ渡ったコッポラは、どんな音楽が必要なのか完璧に指示してロータのイマジネーションを誘い出した。コッポラは音楽家の息子で、音楽をたいへん深く知り尽くしていたのである。

ロータは、日本の蔵原監督の映画「陽は沈み陽は登り」(1973年)にも音楽をつけている。

人間ニーノ・ロータ

ニーノ・ロータは、孤独を愛し、生涯独身で家族を持つことはなかった。背が低く、痩身であった。性格は欠点も多く、几帳面な性格ではなく、たいへん無秩序なものであった。物を捨てるということはなく紙1枚さえとっておくのであるが、きちんとそれらを整理整頓する事は出来なかった。遅刻は常で、時間の感覚というものをまるっきり持ち合わせていなかった。社会はきちんと決められた時間の中で動いているのであるが、彼には全くそれを理解する事

はできなかった。誰かが時間の不正確について、いい加減だと注意すると、彼はたいへんな勢いで怒るのであった。約束はいつも2日程遅れるのが常であり、彼もその事を知りつつ約束の日を決める時は「だいたい水曜日ぐらいにでもお会い致しましょう…」という具合であった。ニーノ・ロータと一緒にいると、どんな気の長い人物も最初はリズムが合わず、怒ってしまうのであるが、ロータを理解し始めると、皆、その暖かな優しさや親切さに心を動かされて、山ほどある欠点を許してしまうのであった。

日本にも2度程やって来たニーノ・ロータは日本の音楽にもたいへん興味を示し、「能」「文楽」「寺社」等を通して日本音楽を知りたかったようである。1回目は1975年東京フェスティバルに、2回目は翌1976年（64歳）に自作を指揮するために来日。3月12日東京厚生年金会館にて新日本フィルを振っている。この頃ロータは、心臓を悪くしており、飛行機に乗るのを禁止されていたにも拘らず、内緒でこっそり日本にやって来て、自作のコンサートを振ったのである。京都に滞在中、ヴィスコンティ監督の訃報が届く。

戦争を嫌い、ファシストから徴兵されるのを避けるために、ローマ近郊に隠れ住んでいた時期もあった彼は、徴兵されていない。彼はどんな苦しい状況下にな置かれても音楽だけをしていれば幸福であった。

未整理資料とニーノ・ロータ財団

1995年2月ヴェニスにニーノ・ロータ財団が発足した。近年遺族より多くの資料が寄贈されて保管されているが、本人は全く整理整頓ができる人物ではなく、引っ越しも数多かったため、かなりの資料が見つからなくなっている。それだけではなく、多数の学者、研究者達が資料研究、未整理のその膨大な資料整理と称してロータ家を訪れたが、その際に盗まれた資料の数もかなりにのぼっていると考えられている。

フェッリーニ、ヴィスコンティ両監督との関係は非常に長く、あれ程の莫大な量の仕事を一緒にしているにも関わらず、全く彼等とのやり取りの手紙の一通も見当たらないのである。雑然と放っておくとはいえ、何一つ捨てる事がなく、何でもしまい込んでおいたロータ、そして何でもすぐに手紙を書く事で有名だった両監督であったのに、なぜか手紙は一通も発見されていない。

このように膨大な数のメモ、書類等は未整理のまま放置されていたが、これから少しずつ財団の発足と共に研究が進んでいく事であろう。人間ロータとその音楽業績、特に今日迄あまり目を向けてこられなかった、純クラシックの

世界が次第に明らかになっていくと確信している。

楽譜の整理、録音、コンサートなど、既にその仕事は始まっている。ピアノ作品には、この楽譜に収められた「戯れるイッポーリト」と「子どものための7つの小品」以外に、代表作の「バッハの名による変奏曲とフーガ」と「15の前奏曲」「バッハの名による2つのワルツ」「バガテル」「幻想曲」があるが、「幻想曲」は現在未整理の状態で公表されていない。CDにはこの「幻想曲」以外の全ての作品を収録した。

◎曲目解説

●戯れるイッポーリト

1930年作曲。サンタ・チェチリア音楽院卒業直後に書かれた魅力的なアレグロ。ミラノのリコルディ社から、初めて出版された作品でもある。青年期と円熟期とを結ぶ橋渡しのピアノ作品。

●子どものための7つの小品

バリー音楽院の教育課程の作品としてロータは幾つかの作品を残しているが、これもその一つである。1972年の作曲。7つの見事な小品が並ぶ魅力的な作品群である。そこには、クリスタルな透明感と技巧的にも華やかなヴィルトゥオーゾが共存している。原題は「子どものための7つの難しい小品」となっている。

- 1) ジャンプと遊び
- 2) カブリッチョ
- 3) 子守歌
- 4) 小さな階段
- 5) 夜のこおろぎ
- 6) ジャングルのブッチェッティーノ
- 7) アクロバット

IPPOLITO GIOCA

戯れるイッポーリト

Nino Rota

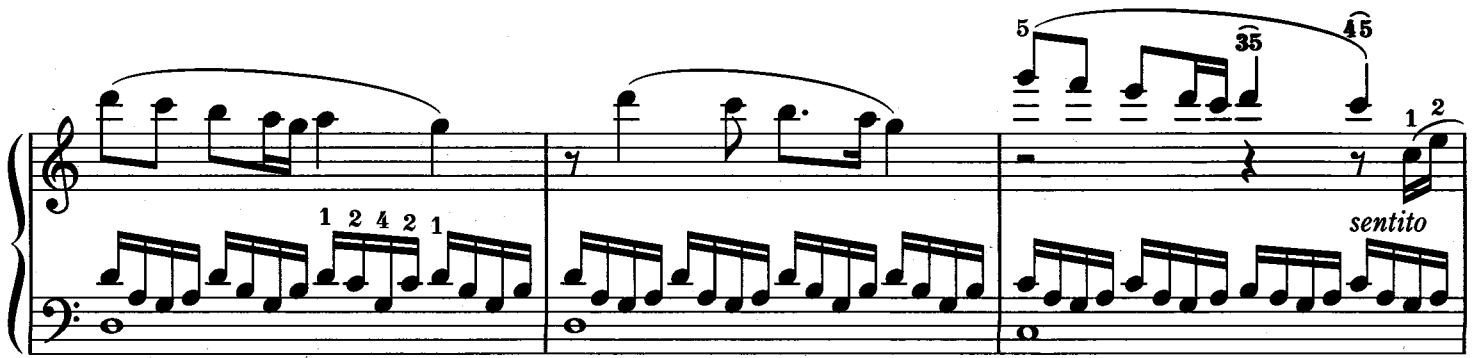
Allegro

mf

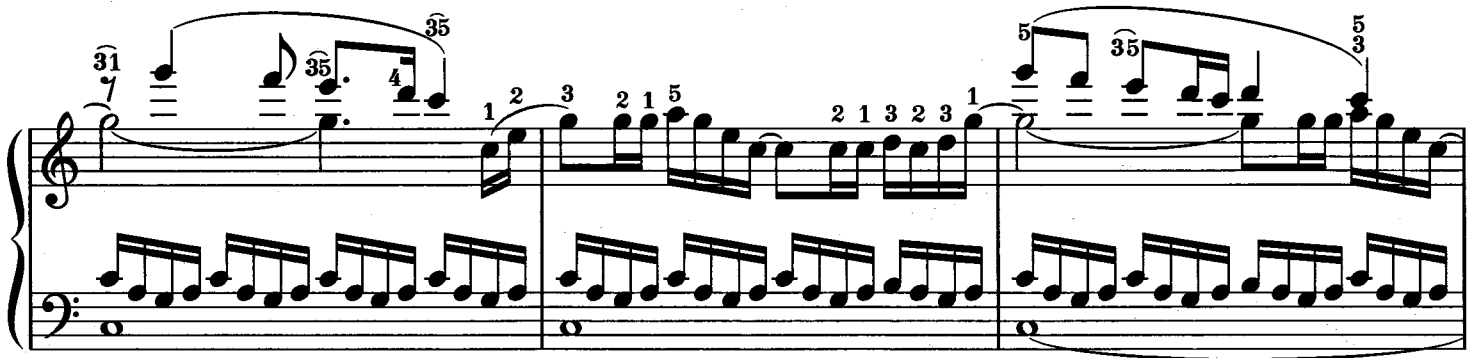
mp espress.

dim.

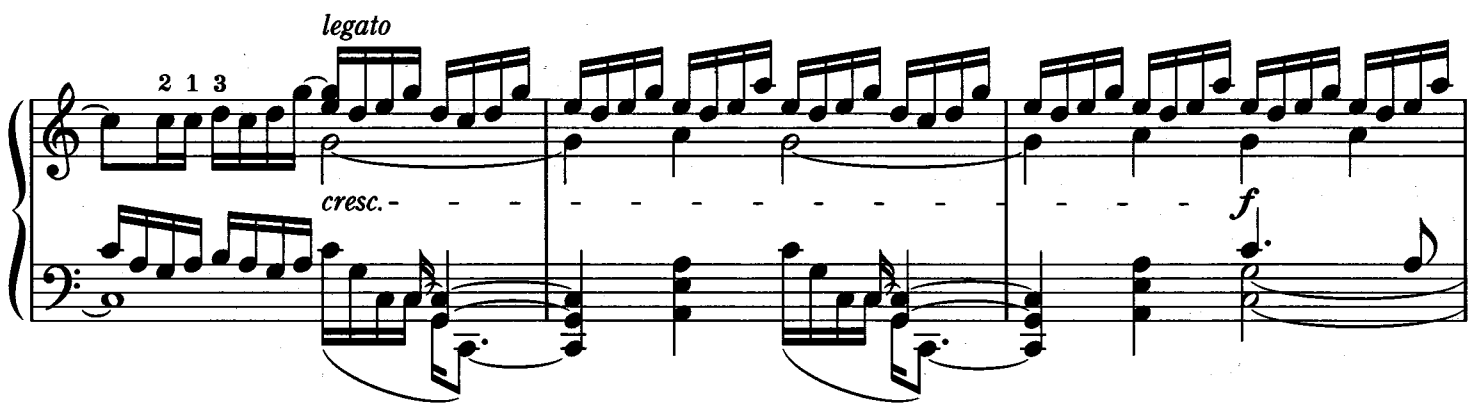
p legato



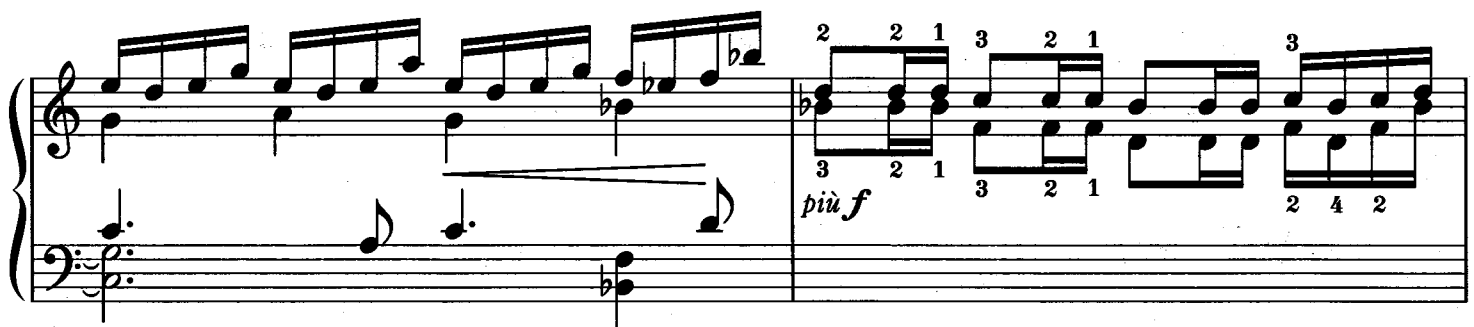
First system of musical notation. The treble clef staff contains a melodic line with a slur over the first two measures and a triplet of eighth notes in the third measure. The bass clef staff contains a rhythmic accompaniment with a slur over the first two measures and a triplet of eighth notes in the third measure. The word *sentito* is written above the bass staff in the third measure.



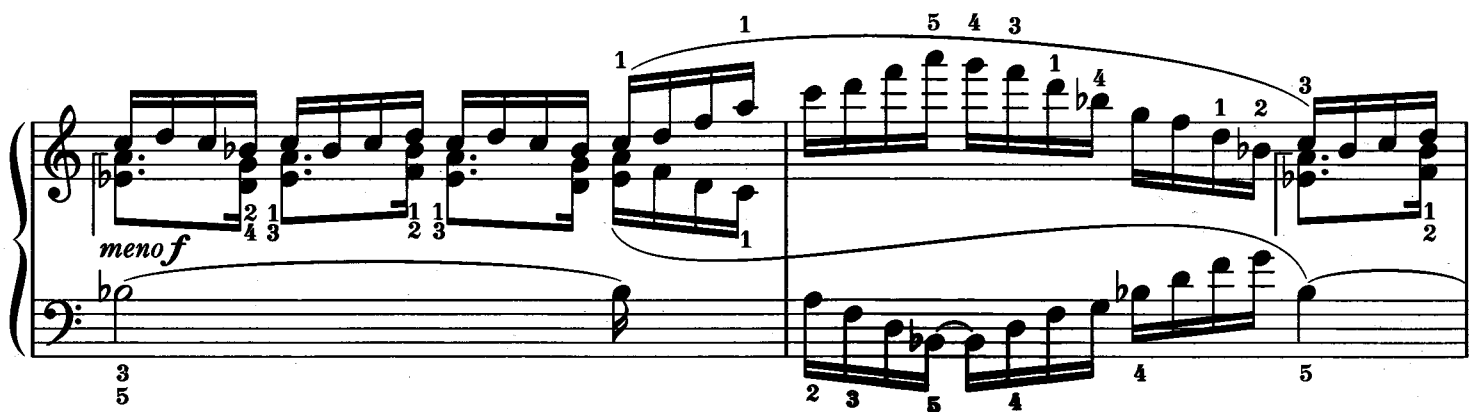
Second system of musical notation. The treble clef staff contains a melodic line with a slur over the first two measures and a triplet of eighth notes in the third measure. The bass clef staff contains a rhythmic accompaniment with a slur over the first two measures and a triplet of eighth notes in the third measure.



Third system of musical notation. The treble clef staff contains a melodic line with a slur over the first two measures and a triplet of eighth notes in the third measure. The bass clef staff contains a rhythmic accompaniment with a slur over the first two measures and a triplet of eighth notes in the third measure. The word *legato* is written above the treble staff in the first measure. The word *cresc.* is written below the bass staff in the first measure. The word *f* is written below the bass staff in the third measure.



Fourth system of musical notation. The treble clef staff contains a melodic line with a slur over the first two measures and a triplet of eighth notes in the third measure. The bass clef staff contains a rhythmic accompaniment with a slur over the first two measures and a triplet of eighth notes in the third measure. The word *più f* is written below the bass staff in the first measure.



Fifth system of musical notation. The treble clef staff contains a melodic line with a slur over the first two measures and a triplet of eighth notes in the third measure. The bass clef staff contains a rhythmic accompaniment with a slur over the first two measures and a triplet of eighth notes in the third measure. The word *meno f* is written below the bass staff in the first measure.

This page contains five systems of musical notation for a piano piece. The notation includes treble and bass staves with various musical symbols, fingerings, and performance instructions.

System 1: The first system shows a complex melodic line in the treble staff with many slurs and fingerings (1, 2, 3, 4, 5). The bass staff provides a harmonic accompaniment.

System 2: The second system includes the instruction *rall.* (rallentando) and *a tempo*. It features a *dim.* (diminuendo) marking and a *tr* (trill) in the bass staff. The tempo changes to 2/4.

System 3: The third system includes the instruction *un poco legato* (a little legato) and *cresc.* (crescendo). It shows a melodic line in the treble staff and a bass line in the bass staff.

System 4: The fourth system includes the instruction *f* (forte) and *marcato*. It features a melodic line in the treble staff and a bass line in the bass staff.

System 5: The fifth system includes the instruction *molto rit.* (molto ritardando) and *mp* (mezzo-piano). It shows a melodic line in the treble staff and a bass line in the bass staff.

SETTE PEZZI PER BAMBINI

子どものための7つの小品

SETTE PEZZI PER BAMBINI

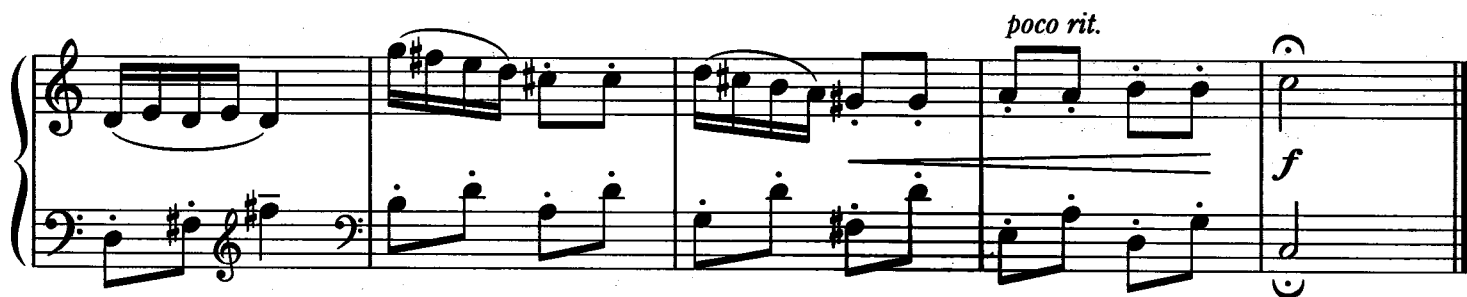
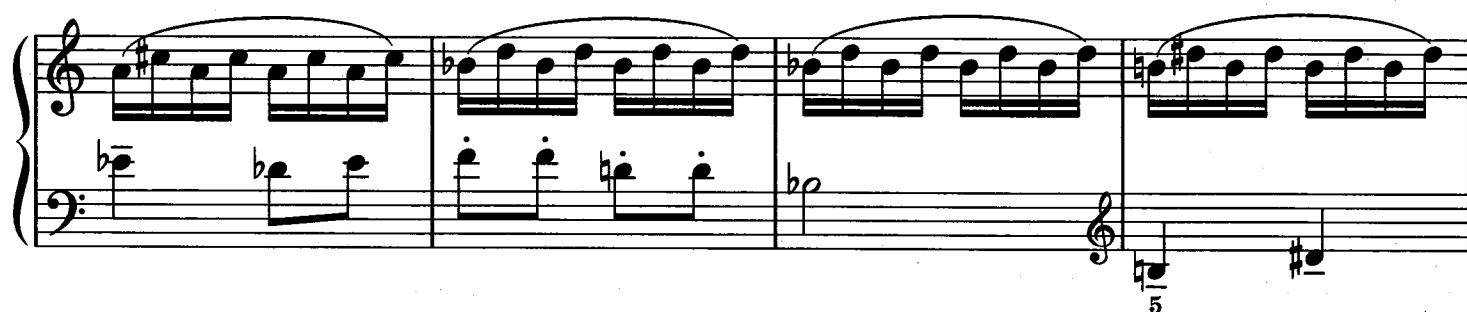
1. SALTI E GIOCHI

ジャンプとゲーム

Nino Rota

Allegretto vivace

The musical score for "Salto e Giochi" is written for piano and bass. It consists of five systems of music. The first system begins with a mezzo-forte (mf) dynamic and features a series of eighth notes in the right hand and eighth notes in the left hand. The second system continues with similar patterns, including some sixteenth notes. The third system starts with a forte (f) dynamic and includes a mezzo-forte (mf) section. The fourth system has a mezzo-forte (mf) dynamic. The fifth system begins with a piano (p) dynamic and features a series of eighth notes in the right hand and eighth notes in the left hand. The score includes various musical notations such as eighth notes, sixteenth notes, and rests, along with fingerings and articulation marks.

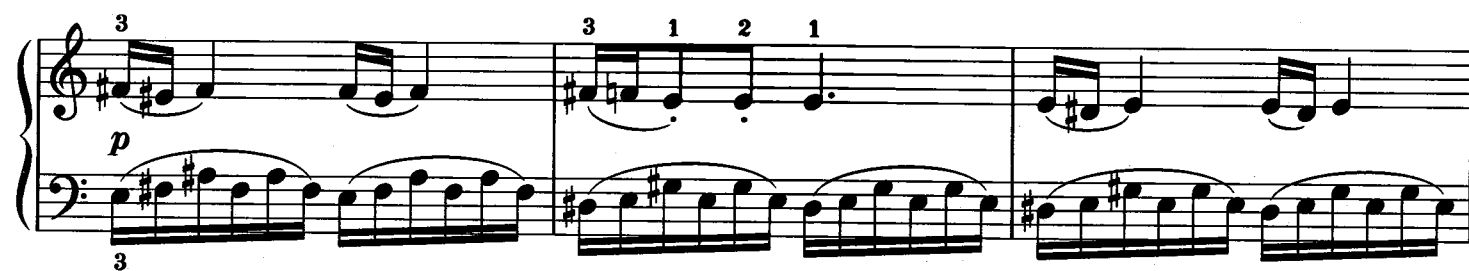


Nino Rota

Allegro

©Copyright 1981 by BMG RICORDI S.p.A. All rights reserved.





3. CANTILENA

子守歌

Nino Rota

Andante

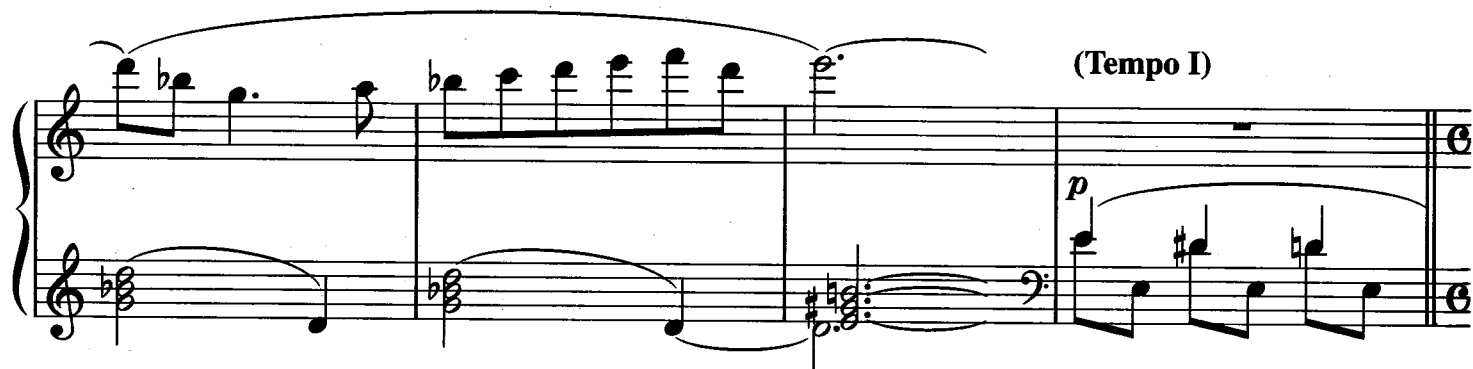
espr. ma semplice

The musical score for "3. CANTILENA" (子守歌) by Nino Rota is presented in five systems of piano accompaniment. The key signature is C major, and the time signature is 3/4. The tempo is marked "Andante".

- System 1:** Begins with a piano (*p*) dynamic marking. The melody is in the right hand, and the bass line is in the left hand. Fingering numbers 2, 1, 2, 1, 2 are indicated below the bass line.
- System 2:** Continues the melody and bass line. A fingering number 2 is indicated above the first note of the right hand.
- System 3:** Includes an *8va* marking above the right hand, indicating an octave shift. The melody continues with a dotted half note.
- System 4:** Marked *cantato dolce*. The right hand features a triplet of eighth notes (5, 3, 1) and a single eighth note (1). The left hand has a triplet of eighth notes (1, 3, 5) and a single eighth note (5).
- System 5:** Continues the melody and bass line. Fingering numbers 3, 1, 3, 1 are indicated above the right hand.



First system of musical notation. The treble clef staff contains a melody with a *pp* (pianissimo) dynamic marking. The bass clef staff provides a harmonic accompaniment with sustained chords.



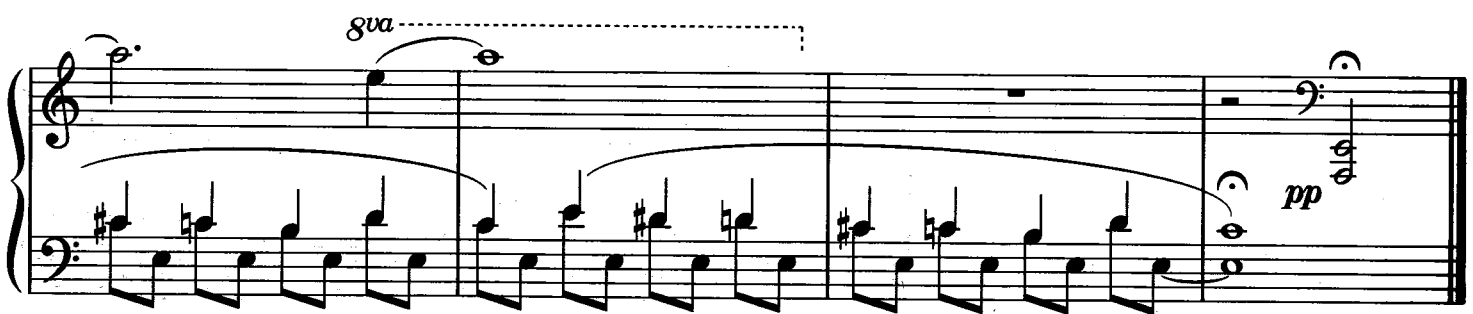
Second system of musical notation. The treble clef staff features a melodic line with a *(Tempo I)* marking. The bass clef staff includes a *p* (piano) dynamic marking. The system concludes with a double bar line and a common time signature.



Third system of musical notation. The treble clef staff has a melodic line with a repeat sign. The bass clef staff continues the accompaniment with a steady eighth-note pattern.



Fourth system of musical notation. The treble clef staff contains a melodic line with a repeat sign. The bass clef staff continues the accompaniment with a steady eighth-note pattern.



Fifth system of musical notation. The treble clef staff features a melodic line with a *gva* (glissando) marking. The bass clef staff includes a *pp* (pianissimo) dynamic marking. The system concludes with a double bar line and a common time signature.

4. LE SCALETTE

小さな階段

Tempo di Valzer

Nino Rota

The musical score is written for piano and consists of five systems. The key signature has two flats (B-flat major), and the time signature is 3/4. The tempo is marked 'Tempo di Valzer'. The score includes various musical notations such as chords, arpeggios, and fingerings. The dynamics range from piano (p) to forte (f). The score is arranged in a standard piano format with a grand staff (treble and bass clef).

espr.
4 1 2 1
p

2 1 2 3 5
pp.

espr.
4 2 1 2 3 5

3 1
cresc.
1 2 3 1 5 3 2

f

poco tratt.
p
2
a tempo

A musical score for the song 'The Rose Tree'. The score is written for voice and piano. The voice part is in the treble clef, and the piano accompaniment is in the bass clef. The key signature has two flats (B-flat and E-flat), and the time signature is 4/4. The piano part features a melody in the right hand and a bass line in the left hand. The melody is a simple, folk-like tune. The bass line consists of a series of eighth notes. The piano part includes a melody in the right hand and a bass line in the left hand. The melody is a simple, folk-like tune. The bass line consists of a series of eighth notes. The piano part includes a melody in the right hand and a bass line in the left hand. The melody is a simple, folk-like tune. The bass line consists of a series of eighth notes.

Measures 1-5 of "The Swan" by Camille Saint-Saëns. The music is in 3/4 time, key of B-flat major, and features a piano (p) dynamic. The melody is in the right hand, and the accompaniment is in the left hand.

A musical score for the song 'The Rose Tree'. The score is written for a single melodic line on a treble clef staff and a bass line on a bass clef staff. The key signature is B-flat major (two flats). The time signature is 4/4. The melody is marked with a piano (*p*) dynamic. The bass line consists of chords and rests. The score is divided into five measures. The first measure contains the melody and a piano marking. The second measure contains a half note rest in the melody and a half note chord in the bass. The third measure contains a half note rest in the melody and a half note chord in the bass. The fourth measure contains a half note rest in the melody and a half note chord in the bass. The fifth measure contains a half note rest in the melody and a half note chord in the bass.

The image shows a musical score for 'The Swan' by Camille Saint-Saëns. It begins with a piano introduction in B-flat major, 3/4 time. The introduction consists of a series of chords in the right hand and a descending scale in the left hand. The main melody begins in the third measure, marked with a piano (p) dynamic. The melody is a simple, elegant line in the right hand, while the left hand provides a steady accompaniment. The score is written on a grand staff with a treble and bass clef. The key signature has two flats (B-flat and E-flat), and the time signature is 3/4. The music is in French, as indicated by the title 'Le Cygne'.

The first system of the musical score for 'The Swan' from 'The Nutcracker'. It features a treble and bass staff in B-flat major (two flats). The treble staff contains a melody of eighth and quarter notes, while the bass staff provides a harmonic accompaniment with eighth and quarter notes. The system concludes with a double bar line.

5. GRILLO NOTTURNO

夜のおおろぎ

Lento

Nino Rota

pp e sempre uguale

simile

p

più sentito

p

dim.

pp

(un filo)

6. PUCCETTINO NELLA GIUNGLA

ジャングルのプッチェッティーノ

Nino Rota

Allegretto moderato

p

mp

f

mf

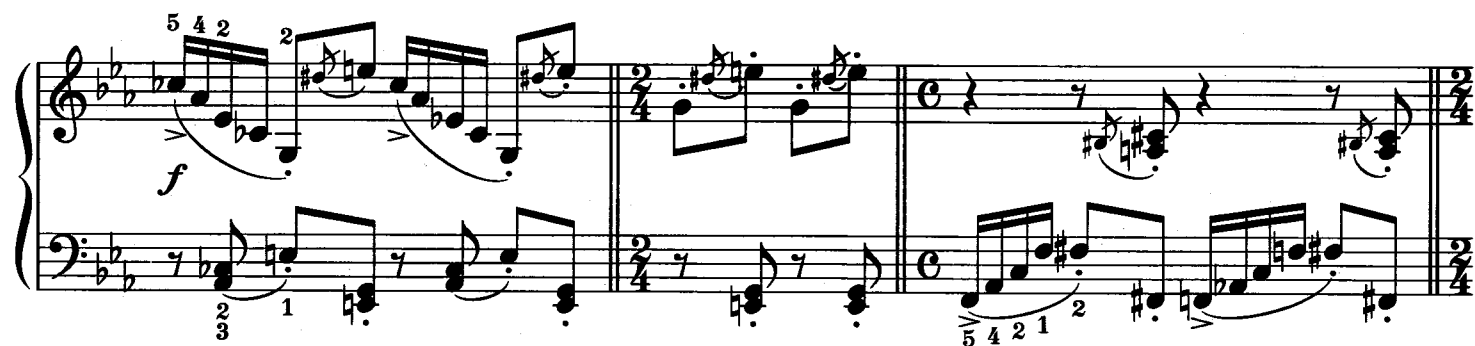
p

leggero

mf

p

mp



First system of musical notation. The treble clef staff begins with a forte (*f*) dynamic and a triplet of eighth notes (5, 4, 2). The bass clef staff features a triplet of eighth notes (2, 3, 1). The system concludes with a 2/4 time signature change.



Second system of musical notation. The treble clef staff includes a triplet of eighth notes and a piano (*p*) dynamic marking. The bass clef staff features a triplet of eighth notes. The system concludes with a 2/4 time signature change.



Third system of musical notation. The treble clef staff includes a triplet of eighth notes and a piano (*p*) dynamic marking. The bass clef staff features a triplet of eighth notes. The system concludes with a 2/4 time signature change.



Fourth system of musical notation. The treble clef staff includes a triplet of eighth notes and a piano (*p*) dynamic marking. The bass clef staff features a triplet of eighth notes. The system concludes with a 2/4 time signature change.



Fifth system of musical notation. The treble clef staff includes a triplet of eighth notes and a piano (*p*) dynamic marking. The bass clef staff features a triplet of eighth notes. The system concludes with a 2/4 time signature change.

First system of musical notation. The treble clef staff contains a melodic line with eighth and sixteenth notes, including a triplet of eighth notes. The bass clef staff contains a supporting line with eighth notes and a triplet of eighth notes. A *cresc.* (crescendo) marking is present above the bass staff.

Second system of musical notation. The treble clef staff features a melodic line with a *gva* (glissando) marking and a dotted line. The bass clef staff contains a supporting line with eighth notes and a triplet of eighth notes.

Third system of musical notation. The treble clef staff contains a melodic line with a *(gva)* (glissando) marking and a dotted line. The bass clef staff contains a supporting line with eighth notes and a triplet of eighth notes.

Fourth system of musical notation. The treble clef staff contains a melodic line with a *poco tratt.* (poco ritardando) marking. The bass clef staff contains a supporting line with eighth notes and a triplet of eighth notes. A *Tempo I tranquillo* marking is present above the treble staff.

Fifth system of musical notation. The treble clef staff contains a melodic line with eighth notes. The bass clef staff contains a supporting line with eighth notes and a triplet of eighth notes. A *mp* (mezzo-piano) marking is present above the treble staff.

First system of musical notation. The left hand (bass clef) plays a continuous eighth-note pattern in B-flat major, marked *f*. The right hand (treble clef) has a 3/4 measure rest, followed by a 3/4 measure of eighth notes, and then a 6/8 measure of eighth notes marked *p*. A triplet of eighth notes is indicated in the final measure of the right hand.

Second system of musical notation. The left hand continues the eighth-note pattern, marked *mf*. The right hand has a 3/4 measure rest, followed by a 3/4 measure of eighth notes marked *p*, and then a 6/8 measure of eighth notes.

Third system of musical notation. The left hand has a 3/4 measure rest, followed by a 3/4 measure of eighth notes marked *mf*, and then a 6/8 measure of eighth notes marked *p*. The right hand has a 3/4 measure rest, followed by a 3/4 measure of eighth notes marked *p*, and then a 6/8 measure of eighth notes marked *mp*. An 8-measure rest is indicated in the left hand.

Fourth system of musical notation. The left hand (bass clef) plays a continuous eighth-note pattern, marked *cresc.*. The right hand (treble clef) plays a continuous eighth-note pattern.

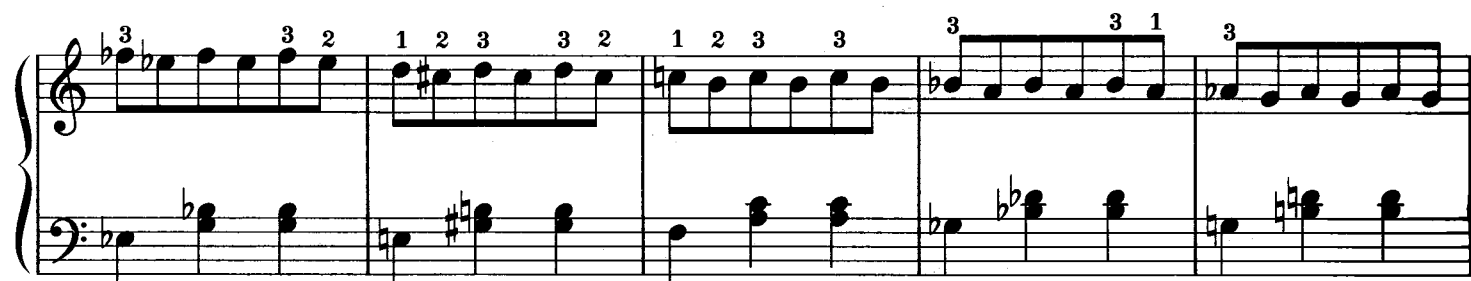
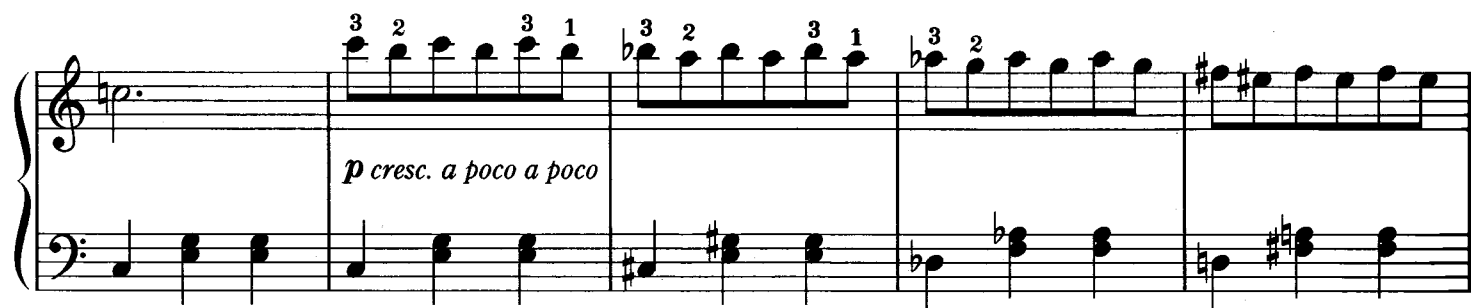
Fifth system of musical notation. The left hand (bass clef) plays a continuous eighth-note pattern, marked *f*. The right hand (treble clef) has a 3/4 measure rest, followed by a 3/4 measure of eighth notes marked *pp*, and then a 6/8 measure of eighth notes marked *gliss.*. A triplet of eighth notes is indicated in the final measure of the right hand.

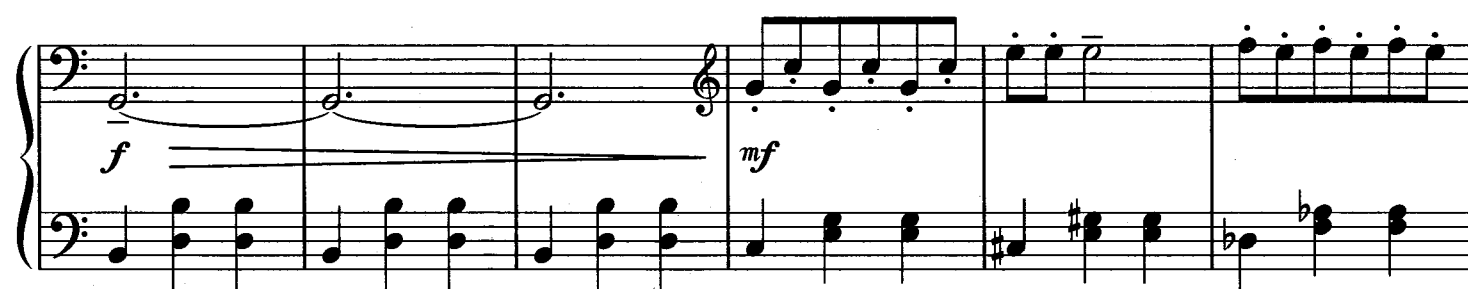
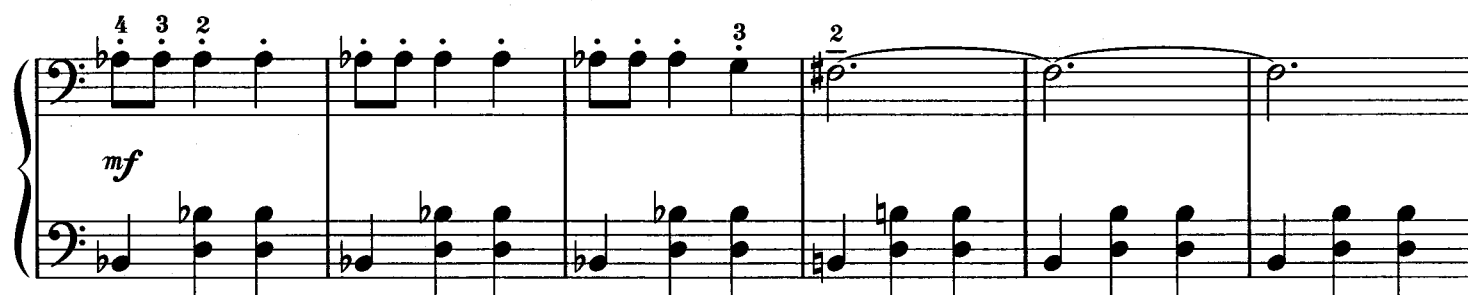
7. L'ACROBATA

アクロバット

Nino Rota

Tempo di Valzer





8va

First system of a piano score. The right hand (treble clef) plays a melody in the octave register (8va), consisting of eighth and sixteenth notes. The left hand (bass clef) provides a harmonic accompaniment with chords and single notes.

(8va)

cresc.

Second system of the piano score. The right hand continues the melody in the octave register. The left hand accompaniment includes a *cresc.* (crescendo) marking over the final two measures.

(8va)

f

Third system of the piano score. The right hand continues the melody in the octave register. The left hand accompaniment includes a *f* (forte) dynamic marking in the third measure.

(8va)

Fourth system of the piano score. The right hand continues the melody in the octave register. The left hand accompaniment continues with chords and single notes.

2

ff

Fifth system of the piano score, concluding the piece. The right hand features a final melodic phrase in the octave register, marked with a *ff* (fortissimo) dynamic. The left hand accompaniment includes a *ff* marking and ends with a double bar line. Fingering numbers 2 and 5 are visible below the final notes in the left hand.